

「台湾少年工」を語り継ぐ ～日台の絆～

1943年、太平洋戦争末期の神奈川県旧高座郡に台湾から8400人の少年工がやって来ました。厚木基地に隣接する高座海軍工廠で働くために台湾全土から12～19歳の優秀な少年たちが選抜されました。高座海軍工廠の関連施設は現在の相模原、大和、座間、綾瀬の各市にまたがっています。

戦時下の日本では労働力が不足し、当時日本統治下の台湾の少年たちが動員されました。学校の先生から「日本へ行けば中等教育を受けつつ工場実習で給料をもらえ、5年後には技師になれる」という好条件に成績優秀な少年たちが志願しました。

希望を抱いて日本の工廠に着いた少年工は、すぐに「だまされた」と気が付きました。教育どころか働きづめの毎日だったのです。旧高座郡の農家の人たちは芋やおにぎりを差し入れたり、少年工の繕い物をしたりして家族のようにかわいがりました。

少年工は基礎技術をみっちり鍛えられ、懸命に働いて、厚木基地配備の局地戦闘機「雷電」を製造しました。少年工は日本各地の工廠にも派遣され、ひもじさ、寒さ、望郷の念や銃爆撃の恐怖に耐えて過ごしていましたが、45年8月の終戦を迎えて突然海軍省が解散になり、少年工は工廠内に取り残されました。備蓄米が底をつき、少年工は自治会を組織、神奈川県に直訴して配給を受け帰国の日を待ちました。

46年1月から少年工は順次台湾に送り返されましたが、帰国した台湾は蒋介石政権で、良い仕事はほとんど大陸から来た外省人に占められ、なかなか仕事に就けませんでした。せっかく身につけた日本語は使用禁止になり、代わりに中国語(普通話)を学ばなければなりません。戒厳令下では白色テロが吹き荒れ、少年工が集まることにも危険が伴い、政治犯として銃殺された少年もいるなど大変な苦勞をしました。

87年に戒厳令が解かれて、やっと「台湾高座会」



台湾高座会の方々は、50周年を契機として、1997年、大和市の引地川公園に「台湾亭」を建立、大和市に贈呈した。

という少年工の同窓会ができました。以後、節目節目に日本の関係者と温かい日台の往来が続いています。93年に50周年の同窓会が日本で開かれた時には、1400人の元少年工が来日しました。元少年工の大半が90代になり、今年の75周年式典に来日できる人は40人前後です。

今秋、座間市の芹沢公園に「少年工顕彰碑」が建立されます。日本での同窓会は今年が最後になるかもしれません。旧高座郡での生活は少年たちが思い描いたものとは違いましたが、「日本は青春時代を過ごした特別な場所」と、今も日本を懐かしんでいます。元少年工は苦しみを乗り越え、ずっと日本を大切に思っています。

私は以前から高座海軍工廠の場所を知りたいと思っていたところ、今夏、新聞に相模原市相武台公民館で台湾少年工の展示があるとの記事が掲載されていました。内容の濃い展示を拝見し、当時工廠で少年工と一緒に事務をとられた方の貴重なお話が聞けました。少年工が毎日歌っていたという「少年工の歌」を朗々と皆に聞かせてくれたときには、当時の少年工の気持ちを思い胸がいっぱいになりました。75年続く「日台の温かい交流」と「台湾少年工の存在」を語り継いでいきたいと思います。

(塚田民枝)